

若手連携の萌芽

～気象気候若手研究者交流会に参加して～

柳 瀬 亘^{*1}・中 村 哲^{*2}・伊 藤 耕 介^{*3}
茂 木 耕 作^{*4}・川 瀬 宏 明^{*5}

1. はじめに

1.1 交流会の概要

2010年9月4、5日に第1回気象気候若手研究者交流会(以後、交流会)が茨城県つくばみらい市のつくばセミナーハウスを借り切って開催された。全国の10の研究機関・大学から計27名の若手研究者が集い(第1図および第1表)、互いに熱い議論を繰り広げた。

交流会では、昼間と夜間で異なる趣旨のセッションが開催された。昼間のセッションでは自己紹介も兼ね、参加者全員が各々の研究内容や自分の持つ技術、他の研究者との接点といった点について、短い時間での発表を行った。一方、夜間のセッションでは、普段から気になっているが、なかなか聞きづらい、言いづらい話題を事前に参加者から募集し、お酒も交えて深夜まで議論した。昨今、若手研究者を取り巻く環境としては、いわゆるポストク問題等が話題に上がることが多いが、本交流会では参加者同士がお互いの研究に刺激を受け、これから自身で行う研究の方向性や共同研究の可能性を模索する姿が印象的だった。

以下の報告は、交流会後に行われたアンケートに基づき、(運営者を除く)純粋な参加者の視点から交流

会の内容を紹介するものである。これとは別に、運営者による交流会の立ち上げの経緯を綴った報告も「天気」の同号に掲載されている(川瀬ほか 2011)。同一の会を参加者と運営者との両方(いずれも若手研究者)の立場から記載することで、交流会の雰囲気や今後の発展の可能性を伝えることを試みた。さらに、交流会での議論となった海外での研究に関連して、海外で活躍する若手研究者の活動に関しても同号に掲載されている(遠藤ほか 2011)。これらを併せて読んで頂くことで、気象分野の若手研究者が感じている様々な可能性を同世代や上下の世代にも感じて頂ければ幸いである。(川瀬宏明)

1.2 参加前の期待と不安

交流会の情報に関しては、開催の2カ月ほど前にメーリングリスト ymnet@kugi.kyoto-u.ac.jp で周知された。初めて立ち上がる交流会は全くの未知のものであった。大学院生の時に参加した夏の学校の延長のような企画なのであろうか?

開催後に参加者からとったアンケートでは開催前に参加者が抱いていた様々な期待と不安が伺える。「同世代であっても知り合う機会の少ない他分野の研究者と交流を広げたい」とか、「将来的には共同研究をともに進めるかもしれない研究者と出会いたい」という期待は高かったようである。また、同世代の立場から、あるいは自分の近未来に関心を持つ博士課程の学生の立場から、「他の若手研究者がどのような興味でそれぞれの研究に取り組んでいるのかを知りたかった」という声もあった。一方で「プロジェクトなどに対する若手研究者の愚痴大会になるのではないか」とか「仲の良いメンバーで騒ぐだけの会なのではないか」という不安もあったようだ。

*1 Wataru YANASE, 東京大学大気海洋研究所,
yanase@aori.u-tokyo.ac.jp

*2 Tetsu NAKAMURA, 国立環境研究所大気圏環境
研究領域, nakamura.tetsu@nies.go.jp

*3 Kosuke ITO, 京都大学理学研究科,
itokosk@kugi.kyoto-u.ac.jp

*4 Qoosaku MOTEGI, 海洋研究開発機構地球環境変
動領域, moteki@jamstec.go.jp

*5 Hiroaki KAWASE, 国立環境研究所大気圏環境
研究領域, kawase.hiroaki@nies.go.jp



第1図 参加者集合写真。写真右下のマークが夜のセッションで作成した「YMO」のロゴである。

第1表 所属機関別参加者一覧。

東北大学	沢田雅洋
筑波大学	井上知栄, 杉本志織, 寺崎康児
気象研究所	大竹秀明, 下瀬健一, 西橋政秀
国立環境研究所	井上 誠, 川瀬宏明, 中村 哲
東京大学	柳瀬 亘
首都大学東京	福島あずさ
日本大学	永野良紀
海洋研究開発機構	小玉知央, 小山博司, 坂井大作, 野津雅人, 中野満寿男, 茂木耕作, 山田洋平, 吉田 聡
名古屋大学	稲飯洋一, 西川将典
京都大学	大塚成徳, 東 邦昭, 伊藤耕介, 宮本佳明

知り合いの運営者から誘いを受けていた柳瀬は、やはり期待と不安の混じる中、参加を申し込むことには躊躇があった。しかし、若手の中から自然発生した会合である点に興味を持ち、何かしら得られるものがあれば儲けものだという気持ちで、とりあえず参加を決意した。

(柳瀬 亘)

2. 参加者による「自己紹介」(昼のセッション)

昼のセッションでは、今回の交流会の企画の二枚看板の1つである参加者による「自己紹介」が行われた。持ち時間10分で何を話しても良いという形式は学会での研究発表とは一味異なる。発表者一人一人が交流会から何かを得ようというモチベーションを持って臨んだ結果、個性あふれる発表と議論の場が自然と作られていった。

このセミナーを通して得られたものは大きくは3つに分けられる。(1) 発表者の研究の背景にある経歴やモチベーションが語られた

ために、研究者の視点からの生き生きとした研究のイメージを体験できた。(2) 若手研究者の大きな共通課題であるプロジェクトとの関わりについて、考え方の幅を広げることができた。(3) 自分が提供できるスキル(使えるモデル, 解析法, 観測機器など)の紹介などを通じて、将来の共同研究の可能性を模索できた。以下では、この3点をもう少し詳しく紹介したい。

2.1 「研究」と「研究者」

参加者の研究分野と手法は第2表に示されるように多岐にわたる。普段の気象学会ではパラレルセッションの異なるテーマとなり、お互いに聞くことができない話も多い。発表者もそのことは十分に意識しており、専門家同士では簡単に通り過ぎてしまう内容もわかりやすく紹介することを心がけていた。その結果、聞き手は他分野の研究への理解を深め、これまで気づかなかった研究の面白さを発見できていたように感じられる。

個々の研究テーマの詳細に関しては各人の論文などを読んだ方が正確であるので割愛するが、雰囲気伝えるためにここでは数例を紹介する。西橋は突風・雷放電の観測プロジェクトで、ナノ秒という非常に短いサンプルタイムで雷放電をとらえられることを紹介した(西橋ほか 2010)。雷放電の起こる仰角が変化して

第2表 参加者の研究対象および研究手法.

研究対象		
地球温暖化		坂井, 川瀬, 野津, 小山, 小玉, 井上 (知)
大気海洋相互作用・大気陸面相互作用		吉田, 茂木, 杉本
成層圏循環・準二年周期振動		稲飯, 中村, 井上 (誠)
大気大循環・エネルギー論		寺崎, 小玉
冬季モンスーン・降雪		大竹
夏季モンスーン・梅雨		福島, 野津, 茂木, 井上 (誠), 井上 (知), 杉本, 永野
台風・熱帯低気圧		伊藤, 宮本, 沢田, 柳瀬, 中野, 茂木
温帯低気圧・ポーラーロウ・爆弾低気圧		吉田, 柳瀬
竜巻・突風・雷・乱流		下瀬, 西橋, 西川, 東
研究手法		
データ解析	客観解析	永野, 福島, 井上 (知), 寺崎
	衛星データ	稲飯, 井上 (誠), 杉本
観測研究	ゾンブ・航空機	稲飯, 野津, 大竹, 茂木
	レーダー	東, 西川, 西橋
モデル研究	領域モデル	川瀬, 下瀬, 杉本, 沢田, 大塚, 宮本, 大竹, 中野
	全球雲解像モデル	小玉, 山田, 柳瀬, 寺崎
	全球気候モデル	川瀬, 坂井, 中村, 吉田, 野津, 井上 (知)
データ同化	4DVAR	伊藤
	EnKF	小山, 茂木, 沢田, 中村

いく様子を示した動画は非常に印象的であった。東はウインドプロファイラを横に向けることで、接地境界層の乱流を観測できることを紹介した(東ほか2010)。既存の装置を異なる手法で利用することで、新しい分野が開けることは多くの参加者の関心を集めた。伊藤はアジョイント方程式を利用することで、台風の風速に影響する物理量を遡って調べられることを紹介した(Ito *et al.* 2011)。アジョイント方程式がデータ同化プロセスの一部としてだけでなく、メカニズムを知るための強力なツールになることをわかりやすい例で理解することができた。

今回の自己紹介の醍醐味は、他分野の研究に触れることもさることながら、その研究がなぜ面白いのかを発表者の視点を通して実感できたことにある。研究のきっかけは人それぞれであった。「世界をできるだけ簡単な理論で統一的に理解したい」という探究心や、「空や渦を見ているのが楽しい」という純粋な興味が語られ、多くの参加者にとって共感できる原点だったのでないだろうか。また、大学の航空部でのグライダーの体験がきっかけであったというアウトドア派もいれば、プログラミングが大好きというインドア派もいて、気象学という分野の間口の広さが感じられ

た。

普段の学会発表では話せないような野望や悩みなども、同世代同士ならではのフランクな話題であった。モンスーンを研究している井上(知)は、日々の研究の根っこには「単純な日射の強制がなぜ現実の複雑な季節推移を生じさせるのか」という問いがあることを語った。メソスケールの渦を研究している下瀬は、複雑に生成消滅する自然界の渦をどうすればわかりやすく記述できるのかという悩みを抱えており、「渦・低気圧研究者」たちの共感を得ていた。プログラミング好きの小玉は、数値流体実験集を自分で一から作ってみたいという長期計画をアピールし、同じ目的を持った研究者に呼びかけた。観測プロジェクトに関わる茂木は、得られたデータの価値を、成果となった論文数だけではなく、企画者の満足度で測るとどうなるかという独自の視点を展開した。

研究周辺の雑談的な話もあり、発表は和気あいあいとした雰囲気で行われた。杉本はチベットの研究で現地を訪れ、チベットの風土や直接に見る雲の感動を写真で紹介した。沢田は鳥人間コンテストに参加する知人のために琵琶湖周辺の風況予測を数値シミュレーションで試みたが外してしまったという失敗談を冗談

交じりに紹介した。福島は研究者としてサイエンスコミュニケーションの重要性を感じ、国際イベントに積極的に参加していることを紹介した。小玉は描画ソフトのGrADSにおいて、雲などを（基本機能には無い）半透明のシェードとして扱う手法を披露して（<http://kodama.fubuki.info/> 2010年11月27日閲覧）、GrADSユーザーの感動を引き起こした。その他にモデルに関わっている研究者が趣味で将棋ソフト開発や馬券の中確率予測システムに挑戦した話や、ダイビングや大食いなど研究と全く関係のない趣味の話もあり、笑いと感動を誘った。発表者の普段の生活の紹介は、その人の研究姿勢ともどことなく繋がっており、人となりを見ることが出来る面白い一幕であった。

以上が「自己紹介」の雰囲気であるが、研究そのものと研究者との有機的なつながりを確認できたことは大きな収穫であると感じられた。これは、純粋な研究成果のみを紹介する学会発表とも、くだけた話題の多い学会期間の夜の飲み会とも異なり、今回のような「自己紹介」の形式であったからこそ十分に情報を引き出すことができると言える。交流会の2カ月後に気象学会の秋季大会に参加したが、交流会を通じて知り合った研究者の発表は、今まで以上に注目して聞くようになった。このことは研究に対する本来の興味とは異なるものかもしれないが、いずれ研究そのものに対しても興味が広がるきっかけとなるのであれば、今回のような「人」としての研究者同士の交流の意義は大きかったと言えよう。次回以降での交流会ではリピーターの参加者もいることを考えると、同じ形式では内容が重複してしまうという問題があるが、やり方を工夫しながら継続したい企画である。

2.2 プロジェクトとの関わり方

個々の研究テーマとは別に、交流会の参加者の多くが興味を持った話題は、お互いの経歴やプロジェクトの様子である。参加者の中には、もともと天文学や地震の研究に携わっていた者もあり、また一旦企業に勤めたのちに研究職に復帰した者もいて境遇は多様であった。

特にプロジェクトとの関わり方を他の参加者がどのようにとらえているかという点が、様々なプロジェクトを渡り歩く境遇にある若手研究者たちの関心の的であった。自分の興味に合うテーマのプロジェクトに常に関わり続けられた参加者もいるが、そうでない者もいる。発表を聞いていると、一見違うテーマをやって

いるように見えても、研究者の中では一貫したものがあるようである。例えば西橋はリモートセンシングという手法を武器に、地震から雷までの広いテーマに挑戦してきた。また、茂木は色々なテーマに積極的に関わることを楽しみたいというスタンスを紹介した。このように、プロジェクトを渡り歩くという状況に様々な考え方があることを知る事ができた。昨今の若手研究者には待遇への不安があると言われる中、交流会においては現状に対する不満は殆ど出ず、多くの参加者が幸せにやっていることを確認できたのは意外でもあった。研究者自身の意識によって現状をより面白く変えていく術を情報交換できた昼のセッションは、参加者の研究モチベーションを高める絶好の場となった。

2.3 共同研究の芽

交流会の目的の1つである共同研究を生み出すという観点からは、「自己紹介」は成功であったのであろうか？交流会後に参加者にとったアンケートでは、「異なる分野への関心が高まり、将来一緒に研究ができそうな期待感が生まれた」という声は多かった。一方で、「具体的な共同研究のアイデアまでには至らなかった」という正直な感想もあった。このことは1泊2日のセミナーで初めて出会った者同士であることを考えると妥当な結果であろう。むしろ今回の交流会をきっかけとして、然るべき時に共同研究の芽が育てば良いというスタンスが、今回の運営者が目指している形なのかもしれない。次回の交流会からは、少しずつ実現するであろう共同研究の進捗や成果を紹介していくのも面白そうである。

最後に少ないながらも新たに生まれた交流会の成果となる活動を2つ紹介したい。1つ目は沢田・杉本・東らによる「琵琶湖の風を測る会」である。前述の沢田の発表がきっかけで、観測から数値シミュレーションまでの手法を含む研究者が連絡を取り合うようになった。このような異分野の研究者のコラボレーションは、正に交流会が目指していたことの具体的な形であろう。2つ目は中野・沢田・宮本・伊藤・柳瀬による「台風セミナー」で、台風の力学に関して十分な時間をとって勉強する会を開くというものである。すでに2011年9月13日、14日に岩手県大槌町にある東大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターでベテランの台風研究者を講師に招いて開催されることが決定した。この5名は台風研究を通じて既に知りあっている間柄であったので、セミナーの構想も交流会よりも前

から話し合われてはいた。しかし、机上の話から具体的な開催の実現に至ったきっかけは、この交流会に参加したことで若手研究者がやれることの可能性を他の参加者から教えてもらったことが大きかったと言える。(柳瀬 亘)

3. 持ち寄りテーマの討論(夜のセッション)

昼のセッションは順調に時間どおり終了し、夕食・風呂の時間となる。参加メンバーの半数くらいが、それぞれお互いに知らない同士であったが、食事や風呂の時間もそこかしこで昼のセッションの続きを話す声が聞こえていた。そんなまだまだ話し足りない様子の一同に用意されたものは、交流会の二枚看板のもう一つ、「酒を交えてフリートーク!」通称ナイトセッションである。通常の大規模な集会などでは懇親会のあとに数名のグループで飲みに出かけ研究談義に花を咲かせるものだが、今回のナイトセッションは少し趣向が違うようだ。3件の持ち寄りテーマに沿って、全員で議論を交わす。ふむふむ、面白そうだ。参加人数が30人程度、また、近い年代・同じ立場の者たちが集まった交流会だからこそ出来る企画であり、運営側の構想力に感心した。

ナイトセッションのテーマは事前に参加者に募ったもので、基本的に内容は自由、話題提供者が議論したい事を皆で議論しよう、との趣旨である。今回は参加者側から2件、運営者側から1件、プラス最後に全員で体を使って本交流会のロゴを作る企画の計4件がナイトセッションのテーマとなった。本稿では以下に4件のテーマとそこで交わされた議論について簡単に紹介したいと思う。

3.1 みなさんは海外へ行きますか?行きませんか?

最初の話題は伊藤による「みなさんは海外へ行きますか?行きませんか?」。タイトルでわかるように海外での研究生活についての議題である。はじめに伊藤からの趣旨説明。伊藤自身が海外進出について同級生から教授、外国人の友人、果てはイラン人タクシードライバーまで十数名にインタビューした結果を紹介し、それぞれの立場での様々な意見がある事を伝えた。それらの意見を踏まえると、若手が海外へ飛び出す事の個人または業界としてのメリット・デメリットがいくつか浮かび上がる。この点について海外研究経験者・未経験者を交えた議論を行い情報共有しようとの趣旨であった。

議論の始まりは海外研究経験の有無を聞くところからであった。今回の参加者の中では3名の経験者(柳瀬・下瀬・宮本)がおり、それぞれに海外経験中のエピソードや感想を語ってくれた。特にオクラホマへ渡った下瀬の、自身の研究対象である竜巻を直に追いかけた体験談は皆の興味を引いた。このエピソードに付随して、研究対象を間近で見られる環境は有意義だが、場所によっては研究/生活環境とのバスターとなるという意見がでた。今回の参加者にはモンスーンの研究者が多く、研究対象となる地域はチベットや東南アジアであり、研究/生活環境は必ずしも日本より良いとは言えない。彼らの中には実際に観測や会議等で足繁く現地へ赴く者もいたが、そこに長く留まり研究生活を営む事が有意義であるかどうか、この点については明確な結論は得られなかった。また、先進国での海外生活であっても食事など文化面や、家族恋人をどうするかなどの現実的な問題を不安視する声はやはり多かった。宮本はオクラホマで1年の研究生活を送ったが、当初は友達が出来ずに苦労もあった。しかし1年を終え帰国する頃にはまだまだ残って研究を続けたいと思うようになった事を語り、価値観の変遷を教えてくれた。研究においても人生においても影響を受けやすいこの世代が“今”海外へ行くべきなのか、またそれは何故か。様々な意見が飛び交い議論は1時間を超えた。「海外であれ日本であれ自分のやりたい研究がある場所へ行けばよい」という意見に対し「海外研究ありきで、とにかくチャレンジする姿勢もアリ。行ってこそ見えてくるものもある」との意見もでた。この点について、現在海外で活躍している若手研究者の意見をもっと聞きたいという事で議論は落ち着き、次の交流会開催時にはインターネット会議などで各国と日本を結んだ議論をする等のアイデアがでた。また、今回の議論が発端となり、海外在住の若手研究者に海外での研究活動に関する記事の執筆をお願いした。「天気」の同号に掲載されているので、興味のある方は是非ご覧頂きたい(遠藤ほか 2011)。

参加者の中に海外経験者は少なかったが、皆それぞれに海外での研究生活に興味と不安を持っていることがわかり、海外研究の情報収集の手立てを確立する事ができた事が本テーマの大きな成果だったと言える。

3.2 個人の嗜好とプロジェクトの指向の接点探索

次の話題は茂木による「個人の嗜好とプロジェクトの指向の接点探索」。昨今の若手研究者はプロジェクト単位でポストドクとして雇用される事が多いが、時に

プロジェクトの指向と自身の方向性がかみ合わなくなる。この時の対処として若手目線でのプロジェクトへのベストな関わり方を模索したいというテーマである。

茂木が自身の例として、プロジェクトとのすり合わせ方法を示し、また、もっと若手の方からプロジェクトの方向性を提案する事でプロジェクトの流れに影響できる!との情熱的な提言があった。続く議論として各自が自身の状況を踏まえた意見を述べたが、プロジェクトの方向性と自身の興味に明確な違いを感じている人は意外と少なかった。一方、茂木の提言に対し、若手は流動性が高いため、すり合わせの必要がそもそも無いのでは、との意見も出た。

議論は若手が主体的に動くための方法論に移った。昼の発表でも簡単な紹介があったが、吉田の関わる新学術領域研究“気候系の Hot Spot” (<http://www-aos.eps.s.u-tokyo.ac.jp/hotspot/> 2010年11月27日閲覧) で立ち上げられている若手研究者連絡会について詳しい説明があり、分野的に近い人は積極的にコミットしようとの事でまとまった。また若手主体の共同研究の芽が出た際にそれを実行に移せる環境(時間・資金・所属機関の研究設備の利用等)についての情報共有もするべきだとの意見もあった。

本テーマははともすればプロジェクトへの愚痴、さらにはいわゆるポストドク問題とも関わりネガティブな議論になりかねない懸念もあったが、全体的に皆プロジェクトでの研究を楽しんでいるようで前向きな議論で賑わったのが印象的であった。全員ではないにせよ、若手主体の行動の必要性を感じ、実際に動く事を模索する姿もあり、お互いに刺激となる議論であった。

3.3 これからの研究者とメディアの関わり方は？

3つ目は川瀬による「これからの研究者とメディアの関わり方は？」気象分野のメディア関係者とも積極的な活動をしている川瀬ならではのテーマであり、また、メディア側も若手研究者がメディアについてどう考えているのか知りたいとの思惑もありセッション提案に至ったようだ。

最も印象的であったのは、議論のはじめ、挙手式でアンケートを取った時の事だ。メディアに出たいかどうかの質問には大半の人がNo、一方自身の研究内容がメディアに取り上げられる事に賛同・嬉しいかの質問には大半がYes。これは若さゆえの我侷なのか、メディアに積極的に出ている方々でも本音を言えば同じ

なのか興味深い結果であった。メディアに出たくない理由の主なもの「メディアは意図的に都合のよい部分だけを拾う」というメディア不信や「メディア対応に割く時間と労力が惜しい」というものであった。これに対しサイエンスコミュニケータの利用を提案する意見があり、賛否が分かれた。実際にサイエンスコミュニケータの活動内容を知らないため、どの程度の力量があり、研究者にとって有用なのか現時点では判断がつかなかった。同様に、いわゆるメディア側、気象キャスターや気象予報士についてもどのような活動をしているのか我々研究者はほとんど認知しておらず、まずはお互いの活動内容を理解できるような交流を作りたいとの意見でまとまった。

全体的な印象として、皆メディアならびに一般に自身の研究を伝える必要性は十全に感じているが、メディアがどんなものかよくわかっておらず、どのような関わり方があるのか知る事から始めなければならない様であった。その為にも次回以降の交流会活動において何らかの交流を推進する方向が決定した事は1つの成果だと言える。

3.4 さらに夜は深く

最後に稲飯提案による「交流会のロゴ作成大会」が行われた。交流会の名称 Young Meteorologists' Overnight session の頭文字 YMO を象ったロゴを、プロジェクトと人間を使った影絵で表し、撮影するという手筈である(第1図右下)。普段は使わない筋肉と脳みそを駆使する楽しさを感じつつ、撮影は進む。「M」の影絵に苦心する中、福島が皆の発想を切り替えた見事な提案をし、拍手と喝采があがった。撮れたての素材を元に明朝までにロゴを完成させるという稲飯の言を最後にナイトセッションは無事終了した。

時刻も24時を回り就寝となるが、その後も渦大好き人間達が集まった渦マニアの集いや、現在の女性研究者の立場について話し合う女性陣を囲む会などのグループが生まれ、朝方近くまで話しこんでいたようだ。

ナイトセッションでは、それぞれのテーマで1時間近く費やすほど活発な議論がなされ、各自の熱い研究者魂が垣間見えたように思う。酒の力を借りたとはいえ、多くの参加者が積極的かつ主体的に議論を作っており、次回は昼のセッションにしたいとの感想もあった。今後交流を図りたい分野の提案もいくつかあり、次回以降の運営に大きな期待がかかることである。

(中村 哲)

4. 交流会全体を通じて

茂木にとって2010年度上半期で最も楽しく充実感を味わえた研究集会であった。その理由として、発表の質の高さ、議論の質の高さ、将来への期待の大きさ、の3つがある。まず、個々の発表の質が非常に高かった。各々が自らを表現する言葉をしっかりと吟味したことを感じさせ、その言葉に熱意が乗り移った引き込まれる発表をいくつも体験した。これは、主催者の提案した会の趣旨と発表形態や議論の進め方が十分に練られていて、かつ力みのない当日の運営が、引き出した大きな成果だろうと思う。同世代の参加者を対象に自分を伝える場、という目的がはっきりしていて、聴き手をイメージしやすかったことも、発表の内容や説明の言葉を作り易くしていたように思う。

次に、議論が広くかつ深かった。個々の発表の議論については、それぞれが発表時間をきちんと守り、議論の時間を十分に残すように行われたことが大きいだろう。夜の議題提供や2日目の総合討論においては、時間を気にせず言いたい事を言える状況ができており、正確に把握していないが、ほぼ全員が何かしらの意見を述べていた。この自由に言いたい事を言える状況を創り出すことも、同世代で集まった大きな理由の1つだっただろうと思うが、その点も非常に成功していたと言える。

最後に、参加者の多くがこの交流会を今後継続していくことに大きな期待を抱いた。その最大の証拠は、次回の主催・運営に対してほとんどの参加者が積極的に関わる、という意思表示をしたことである。この交流会になんとなく受身で参加していたら、このようなことは絶対に起こらない。この集まりにおける将来への大きな期待を持っていることを参加者の多くが互いに感じ取っていたと思う。

会場に選ばれたセミナーハウスは、清潔感があり食事も良かったが、その会場の魅力だけで特別にひきつけられるようなところではない。それだけに、この集会で味わった充実感や楽しさは、環境の付加的な要素を排除した純粋な交流会そのものの質を反映したものだろうと思える。本当に素晴らしい体験を提供してくれた主催者のメンバーには心から感謝したい。

(茂木耕作)

学位論文提出を控えた博士課程3年生の伊藤にとって、今回の交流会の開催の報は、非常にありがたいものであった。というのは、これから先自分が研究者と

して活動をしていくことを考えたときに、自分より少し上の先輩たちが何を考え、どのようなことにやりがいを感じ、また、どのようなことに困難を感じているのか、ということ、日本中から集まる皆さんに直接お伺いする絶好の機会だったからである。

今回の交流会では、参加者の年齢を博士課程3年生から30代後半程度までに対象を絞って募集を行った。これについては、もちろん善し悪しがあるかと思うが、伊藤個人としては、世代が近いこともあって、初めてとは思えないほど諸先輩方と打ちとけ合うことができたように感じている。

今回お会いした皆さんは、不平をなんやかやとぼやくわけではなく、周囲の困難と闘いながらも、研究者としての夢に向かい、志を持って研究に臨んでいる方がほとんどであり、目がキラキラしているのが印象的であった。日々の生活においては、どこからともなく研究者として生きていくのは厳しいという風評ばかり聞こえてくるが、少なくとも、今回の交流会では研究者人生が「楽しそう」という展望を持つことができた。このような素晴らしい会を企画・運営していただいた幹事の皆様に改めて感謝申し上げたい。

(伊藤耕介)

5. 交流会の今後について

交流会後のアンケートでは全体的な感想として、会の規模・参加者の研究分野のバランスが良く、研究者間の交流としては非常に良かったとの声が多かった。一方、第1回ということもあり、具体的な共同研究のアイデアにまでは至らなかった。この点は次回以降の大きな課題であるが、第2.3節で述べた様な幾つかの共同研究の芽も生まれ育っている。また、第2表を見ると、同じ研究対象を異なる手法で研究するもの、同じ研究手法で異なる対象を研究するものの組み合わせがいくつもあり、互いの研究をうまくリンクすることで実りある共同研究に発展する可能性を感じる事が出来る。この「可能性」を「実現」するための有効な手立てとしてこの交流会は今後も続けていくべきだと思う。

最後に本交流会の今後の活動について述べたい。第1回となる今回の運営は別掲の開催報告にあるようにお互いに良く知った者同士のチームワークにより行われ成功を収めた。次回運営幹事は、今回の交流会により交流が深まった参加者の中から選ぶ事とした。つまり、第2回の交流成果が第2回運営のチームワークと

して試されるのである。現時点では本報告の執筆者陣が中心となる事が決まり、また、すでにその他何名かの協力が頂ける事が決まっている。

交流会当日そして後日にも、次回交流会に関する様々な意見・アイデアが寄せられた。それらをうまく取り込み、より活発な議論、そしてより具体的な共同研究の芽を成果として出せるよう頑張りたい。

(中村 哲)

謝 辞

本報告でこれまで述べたように交流会は非常に楽しく有意義なものであった。交流会参加者一同から、交流会を立ち上げ企画運営に尽力した運営者の方々に謝意を表したい。

参 考 文 献

遠藤智史, 黒田剛史, 古関俊也, 安成哲平, 山下陽介,

2011: 日本を飛び出して. 天気, 58, 275-281.

東 邦昭, 古本淳一, 橋口浩之, 津田敏隆, 2010: ウインドプロファイラを用いた大気境界層の観測. 日本気象学会2010年度春季大会予稿集, D105.

Ito, K., Y. Ishikawa, Y. Miyamoto and T. Awaji, 2011: Short-timescale process in a mature hurricane as a response to sea surface fluctuations. J. Atmos. Sci., submitted.

川瀬宏明, 杉本志織, 下瀬健一, 小玉知央, 稲飯洋一, 沢田雅洋, 坂井大作, 中野満寿男, 井上知栄, 永野良紀, 2011: 若手連携の土壌作り ~気象気候若手研究者交流会の立ち上げ~. 天気, 58, 269-273.

西橋政秀, 下瀬健一, 楠 研一, 別所康太郎, 星野俊介, 新井健一郎, 保野聡裕, 足立啓二, 加藤 亘, 鈴木修, 中里真久, 益子 渉, 山内 洋, 林 修吾, 猪上華子, 楠目雅子, 2010: 庄内突風観測プロジェクトによる冬季雷観測 一初期観測結果一. 日本気象学会2010年度春季大会講演予稿集, A409.